

バタニック諸語（フィリピン）における
アクセントの消失と発生*

森 口 恒 一
(熊本大学)

Accent Evanescence and Genesis in the Batanic
Language Group in the Philippines

MORIGUCHI, Tsunekazu
University of Kumamoto

The accent system—suprasegmental phoneme—is observed in many of the Philippine languages and its primary feature is length, which is realized by the prolongation or shortening of the penultimate syllable. But the system is not always in existence in all the Philippine languages. From the historical point of view the accent system did exist in the Proto-Philippine language [Zorc (1978)]. Some languages inherit the system, but others do not. But there are languages in which the reflections of the Proto-Philippine accent are not observed, but the duration functions as a phoneme. This means that, after the loss of the Proto-Philippine accent system, the languages newly generated the system.

This paper deals with the loss and the genesis of the accent system among the languages in the Batanic language group, which are spoken by the people on the islands in the Bashii Channel, the Balintang Channel and the Babuyan Channel which lie between Formosa and the Luzon Island.

The languages in the group vary from each other as to the accent system, though all the languages have lost the Proto-Philippine accent; Itbayat and Yami do not possess the system, Ivatan and Babuyan Claro, on the other hand, do.

The comparison of the words containing the duration accent in Ivatan and their cognates in Itbayat reveals that the disappearance of the consonant /h/ in Itbayat, which is a remnant of the Proto-Philippine phoneme /h/, results in the prolongation of the vowel before or after the consonant. The consonant /h/ in Itbayat changed into the glottal stop /ʔ/ and the consonant disappears afterwards with the prolongation of the vowel as a compensation. As the result the lengthened

* この小論は、科学研究費57年度（57710209）と59年度（59710265）の援助による研究と60年度の文部省海外調査（60041013 代表者：土田滋）の調査結果の一部をまとめたものである。

この論文を書くにあたり東京外国語大学AA研文法プロジェクト音韻部会に参加され有益なコメントを頂いた方々にここでお礼を申し上げたい。

vowel became in opposition to the short or non-prolonged vowel in the dialects of the Ivatan language—Ivasay and Isamorong. But the Yami language that does not seem to have wholly undergone the change shows only slight prolongation of the vowel, which is a trigger to the metathesis of the consonants in the words like [otod] in Yami.

I はじめに	III バタニック諸語
II AN諸語, Phi.諸語のアクセントの通時的な研究	IV アクセントの消失と発生
	V 結論

I. はじめに

フィリピン、台湾・高砂族の諸言語におけるアクセントの問題が最近やっと脚光をあげて来たようである。特に、共時的な各言語の研究が単に耳からの情報による記述だけではなく、音響音声学的に機械などによる分析も多く行われるようになった。そして、そのような研究の結果を土台として一歩進んで通時的な面からこのアクセントの問題について詳細に論じようとしている時でもある。

フィリピン、台湾・高砂族の諸語における

アクセントについては、その語群に属するすべての言語に関して統一的にアクセントの有無が決定されるものでもないし、また、たとえ有ったとしてもその内容が一致しているとは限らない。しかし、今の所音響音声学的な分析を基本にして長さがアクセント素であるということは、それぞれの言語学界では認められているようである。しかしながら、その分析は今の所単語レベルの研究が主に行われているだけで、句、節、文、文章等のレベルにおけるアクセントとその移動については事実として認められてはいるが、その研究は充分には行われてはいない¹⁾。

- 1) 長さがアクセントとして解釈されているというのが、フィリピン諸言語を研究する人達の一般的な傾向である。しかし、必ずしもすべての言語においてアクセントが存在するとは限らないし、また、Stress (強弱) がアクセントとして機能している可能性のある言語もある。

フィリピンの言語学史上で初めてアクセントについて言及したのは、スペイン人達であった。彼らはキリスト教の布教と同時にその当該する地域の言語について色々な著作を行った。その著作の中で長い間アクセントの表記が使われて来て、確立したのは1800年代になってからである。それが一定の規則化されたのは20世紀になってからで、その表記をフィリピン国立国語研究所 (I.N.L.) が受け継ぎ、今のピリピノ (タガログ) 語の一部として受け入れられたのである。

ピリピノ (タガログ) 語の正書法では次のようになっている。

- | | |
|-------------|-----------------|
| ① pala シャベル | ③ palá ああ〜だったのか |
| ② palà 優美さ | ④ palá 報い |

しかし、上記の表記法はアクセントだけではなく、語末の声門閉鎖音 (Glottal stop: ?) をも表記しているので①~④は、

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| ① pala → pála (=pālā) | ③ palá → palá (=pālā) |
| ② palà → pála? (=pālā?) | ④ palá → palá? (=pālā?) |

それゆえ、この表記では単語の語末から二音節目にアクセントが有る場合 (①, ②) と語末にアクセントがある場合 (③, ④) の二種類に分けられる。

しかし、上記のものは二音節の基本的な単語の場合で、接辞 (Prefix, Suffix, Infix) の付加された場合や音節重複 (Reduplication) が行われた場合にはアクセントマークが書き込まれる場合もある。

アクセントが音節の長短であるとしているということは非常に奇妙に思えるし、特に日本語について研究している人達にとっては受け入れがたいように思われる。しかし、構造主義のはじまりの時代からアクセントを構成している要素は stress (強弱), pitch (高低) と duration (長さ) であるとされているし、最近では Autosegmental Theory の観点から長さ (Duration) がアクセント素であるとしている人達もいる。[McCarthy (1981), Leben (1980), Stemberger (1984), Lehiste (1985)] また、長さに関してはそれを単に記述すればすむものではなく、それが属する言語の体系が問題であり、その言語についての全体的な構造を論じないで、単にアクセントの長さだけを取り上げて論じることは全く無駄なことであろう。

そこで、この小論ではアクセントが単語レベルでは語末から二番目の音節の長短であるとして (´´), その体系が存在する言語とそうではない言語がある狭い地域に点在し、その上にそれらが相互に密接な言語学的な関係を持つグループを作り上げている言語を例にして、そのアクセントの消失と発生に関し

て通時的な面から論じようと思う。

その言語グループとはバタニック諸語²⁾ と呼ばれているグループで、台湾とフィリピンの国境地帯に点在する4つの言語から成り立っている。

II. AN 諸語, Phi. 諸語のアクセントの通時的な研究³⁾

オーストロネシア祖語においてアクセントの体系が存在したかどうかは、現在の所結論が出ていない。ある学者はあったはずであるとしているし、一方、別の学者は無いと主張している。

オーストロネシア比較言語学でアクセント体系について最初に言及したのは Dempwolff (1934) であろう。彼は、アクセントに関して、

Für den Aufbau der Ursprache läßt sich aus der Vergleichung des Wort-Akzents in den drei Sprache⁴⁾ kaum ein neuer Gesichtspunkt gewinnen. (p. 36)

と述べ、そして、この文章の前では確かに実

し、品詞が変化する場合にもアクセントの移動が認められる。

magsásabi (√sabi 言う)

sulatan (√sulát 手紙を送る Locative Focus)

magsúsuót (√suót 着る)

sulatán (√salat 机)

今でも以上のようなアクセント表記をしているが、その音価がはっきりしてはいなかったが、現在では長さであろうと言われている。

スペイン人達による文法書などの記述の他に今世紀になって Bloomfield (1917), Blake (1921), Bowen (1969), Schachter et Otnes (1972) などにはアクセントに関する記述がある。しかし、この記述すべてが統一的な見解を示してはいない。

Bloomfield (1917), Blake (1921) などは Stress (強弱) アクセント説をとり、Bowen (1969) は長短アクセント説をとっている。一方、Schachter et Otnes (1972) において長短が弁別的であると同時にアクセントは Stress (強弱) であるとしているが、Stress に関して弁別性は明白には述べていなく、一貫性が無いのである。

しかし、最近の論文では Moriguchi (1977) の音響音声学的分析や Zorc (1978) の分析によりタガログ語などのアクセント一弁別的かおせ音素一は長短であるとしている。

- 2) このグループの名称は、学者それぞれに色々と呼んでいる。その一つは、この海峡の名前からバシイック (Bashiic) 諸語、また、この島々の言語的な中心地である町の名からヴァサイック (Vasayic) 諸語、その他に、その島の名一バタン島からバタニック (Batanic) 諸語と三通りあるが、色々と不便な面があるために、一応バタニック (Batanic) 諸語に統一しようという方向にかたまりつつある。
- 3) AN=Austronesian
Phi.=Philippine
- 4) タガログ (Tagalog) 語、トバ・バタック (Toba-Batak) 語、ジャワ (Java) 語。

験音声学的な面の研究の不充分さと資料の少さがあると述べているが、UAN⁵⁾におけるアクセントに関しては非常に否定的な意見を出している。

一方、このアクセント体系が存在するのではないかと考えている学者達もいる。

[Charles (1974), Dyen et McFarland (1970), Dahl (1981)]

Dyen et McFarland (1970) において祖語におけるアクセントの音価がいかなるものかははっきり述べていないし、また、アクセントマークはついているが、それはフィリピン諸語の現地調査のためのものであるとして、PAN⁶⁾ においてアクセントの体系があったと主張しているわけではない⁷⁾。

Dahl (1981) においては *Suprasegmental Features* という一章で PAN, またはオーストロネシア語族に属する言語のアクセントについて論じている。彼は、今後色々な研究が必要であるとはしているが、PAN においてアクセント体系が存在しているのではないかとしている。しかし、その場合その音価がどのようなものであったかは明白に述べてはいないが、長短アクセントの可能性はあるとしている⁸⁾。

Dahl (1981) のアクセントに関する論述は、その多くを Zorc (1978, 1979) などの論文に依っている。

PAN におけるアクセント体系に関しては何も言及してはいないが、フィリピン語群のアクセント体系についての研究を行い、通時的な面から詳細に考察し、説得力のある論を提出しているのが David Zorc の一連の論文である。[Zorc (1972) (1978) (1979) (1983)]

彼は、Zorc (1972) において初めて Proto-

Tagalic Stress という形でタガログ祖語におけるアクセントについて考察している。彼はこの論文では、アクセントは Stress (強弱) であるとしていた。Zorc (1978) では一歩進んで Proto-Philippine のアクセントの再構成を試み、それとは別に新たにアクセントが生成された言語について考察を加えている。この論文の脚注 ((2), p. 100) において彼は Zorc (1972) でアクセントは強弱 (stress) であるということに対して訂正を加え長さ (length) であるとしている。また、最後にはアペンデックスとしてフィリピン諸語の再構成されたアクセントをそれぞれの単語についてこまかく示してある。

一方、Zorc (1979) では、Zorc (1978) の延長として、典型的なフィリピン祖語のアクセント体系を失い、その後アクセントの体系を生成したフィリピン・ルソン島中部のパガシナン (Pangasinan) という言語のアクセントの分析を行っている。

Zorc (1978, 1979) の内容に従ってまとめると、通時的なアクセントの変化は以下の四タイプが考えられる。

	I	II	III	IV
Pr. Ph のアクセント体系	○	○	×	×
アクセント体系の発生	×	○	○	×

そして、このⅢのタイプの言語の一つがパガシナンなのである。

Zorc (1983) では、それまで彼が書いたアクセントに関する論文に対するコメント、及び批判に対して彼なりの答えを出している。その中で注目すべきことはアクセントと子音の音変化についてである。

5) UAN=Uraustronesisch. Dempwolff の再構成

6) PAN=Proto-Austronesian

7) Cf. Zorc (1978) p. 68. ただ、このような表現をしているが、祖語におけるアクセントの体系の存在を否定しているのではなく、どちらかというにあったのではないかと考えているのであろう。

8) Dahl (1981) で長さが PAN のアクセントであるとはっきりと言い切れない理由は、台湾・高砂族の諸言語におけるアクセントのタイプが長短ではなさそうだとしているからである。しかし、Moriguchi (1982, 1983a) やその他の言語の記述を見るとその結論が正しいかどうか問題である。

III. バタニック諸語

フィリピンと台湾との国境地帯にあるバシー海峡、バリタング海峡そしてバブヤン海峡⁹⁾に点在する島々で使われている言語のグループがバタニック諸語である。このバタニック諸語はフィリピン諸群に属するが、地理的な面からだけではなく、言語学的にもフィリピン諸語と台湾・高砂族の諸語との橋渡しをする非常に重要な言語グループである¹⁰⁾。

現在わかっているこのバタニック諸語に属する言語は、北からヤミ (Yami) 語 (台湾)、イトバヤット (Itbayat) 語、イヴァタン (Ivatan) 語、そして、バブヤン (Babuyan Claro) 語 (三言語はフィリピン国内) の四つの言語である。そして、ヤミ語とイヴァタン語にはそれぞれいくつかの方言がある。

バシー海峡の島々は15世紀ぐらいからヨーロッパの古い地図に出ているし¹¹⁾、また、この海峡はアメリカ等がかつて捕鯨を行っていた所でもある¹²⁾。その一番北にある蘭嶼 (紅頭嶼) はヤミ語が使われている島である。

このヤミ語に関しては日本人の研究が最初であった。それは明治時代後半、日清戦争の結果、台湾が日本の領土となったためである。鳥居 (1902) ではヤミ族の人類学的な調査の報告を行っており、その中にはいくつかのヤミ語の語彙も記述されている。その後、昭和3年4月に台北帝国大学が創立され、そして、文政学科に土俗学科と言語学科を設けた。この二つの学科を中心として広範囲に台湾・高砂族の言語と文化等の調査を行った。この言語学的な調査の結果のひとつが小川・浅井 (1935) であった。この本の著者の一人である浅井恵倫はヨーロッパに留学して、オランダのライデン大学に博士論文としてヤミ語に

ついでの研究の結果を提出している。これが Asai (1936) である¹³⁾。この著書は発表後すぐに出版された Trubetzkoy (1939) にも引用されている。

ヤミ語の研究は、戦後一時中止されていたが、'60年代になって Ferrel (1969) が出版され、'70年代後半になって調査熱が高まり、森口 (1980)、Liu (1981) のヤミ語のテキスト、Jeng (1981) による動詞の接辞の研究が発表されると共に、Tsuchida (1981) のヤミ語の魚名の研究もなされた。また、Ferrel (1969) にはヤミ語の方言に関する報告を行っている¹⁴⁾。

一方、フィリピン側の島々に関しては Dampier (1697) の報告があり、Ivatan 語の記述は Retana (1834) などが見られる。イヴァタン語の研究は Scheerer (1908) によって始まったと言えよう。Scheerer は前述の鳥居の報告に影響を受け研究をはじめ、語彙の比較によりイヴァタン語がフィリピン語群に属することを示した。[Scheerer (1908)]

Scheerer (1925) では Ivatan 語のテキストを採録している。また Dempwolff (1926) においては Scheerer (1908) と *Vocabulario Español-Ibatán* (1914) をもとにして、イヴァタン語がオーストロネシア祖語の“L”に関する研究に重要な位置をしめしていることを示した。イヴァタン語の研究も戦中・戦後には一時停滞したが、Cottle & Cottle (1958)、Reid (1966) などのアメリカ人達によって研究が再開された。

その後は、アメリカ留学を終えた Hidalgo 夫妻による Ivatan 語に関する研究がある。彼らはイヴァタン語の南方言 (Isamorong) を母語とするフィリピン人である。そして、彼らの論文、著書として Heye et Hidalgo

9) Bashii Channel, Balintang Channel, Babuyan Channel

10) 土田 (1977)

11) Asai (1936)

12) Melville (1851)

13) この間の詳細な経緯は土田 (1984a) に書かれている。

14) Ferrel (1969) p. 72.

(1967), Hidalgo et Hidalgo (1970, 1971) がある。一方、北方言 (Ivasay) は Reid (1966) で取り扱っている。しかし、そのインフォーマントはバスコからミンダナオ島へ移住した人達を使っているなのでその資料に少し不統一な所がある。

一方、イトバヤット語に関しては日本人研究者の独壇場で、それも一人だけで非常に広範囲に調査を行っている。その地勢の荒々しさと交通の不便さゆえにフィリピン人やその他の外国人による研究は行われてはいない。[Yamada (1967, 1972a, 1972b, 1974, 1976, 1981)]

また、この数年来台湾とフィリピン、特に、このバシー海峡の島々の研究が土田、山田、森口の三人によって行われ新しい資料が付け加えられるはずである¹⁵⁾。

バタニック諸語の全体的研究は、Scheerer (1908) によるイヴァタン語のフィリピン語群に属するという証明と Asai (1936) の台湾のヤミ語がイヴァタン語のグループ、すなわち、バタニック諸語に属し、フィリピン語群に属することを明らかにしたものが最初であった。その後、このバタニック諸語が台湾・高砂族の諸語とフィリピン諸語との橋渡しをするグループの言語であることを示したのは土田 (1977) であった。

バタニック諸語の内部的な相互関係を考察したのは Moriguchi (1983) である。この論文の結論として、一応試案として提出しているバタニック諸語の関係は次のようになっている。(図1)

IV. アクセントの消失と発生

(A)

バタニック諸語におけるそれぞれの言語の音韻体系はすべてが明らかになっているわけではない。しかし、アクセントの体系がある

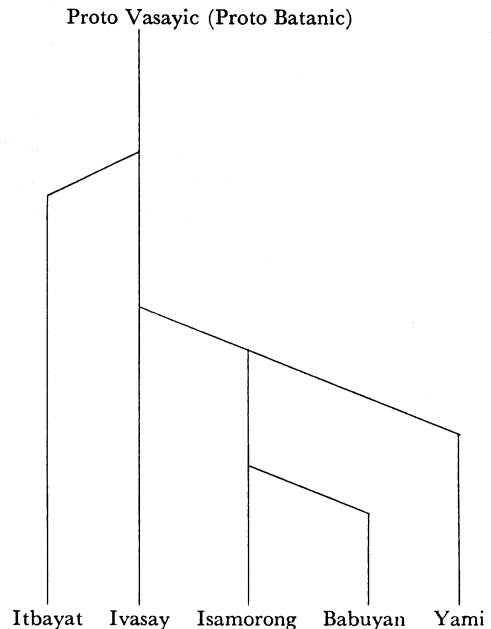


図1

かどうかに関しては未確定の言語もあるが次のようになっている。

台湾	Yami 語	{ Imorod 方言	?
		{ Iralalay 方言	×
フィリピン	Ivatan 語	{ Itbayat 語	×
		{ Ivasay 方言	○
		{ Isamorong 方言	○
	Babuyan Claro 語		○

(○:有 ×:無 ? :未定)

この場合のアクセントとは、すべて語末から二番目の音節 (Penultimate) の長短によって示される長さアクセントである。Yami 語の Imorod 方言にはアクセントとして認められるものがあるかどうかは非常に疑問である。しかしながら、アクセント的なものの萌芽または残存物のような現象が見受けられるために未定としてある。

15) 特に Babuyan Claro 語の報告書は、聖書の翻訳や部分的な語彙調査報告書があるが、現在の所完全な報告書は公けにされていない。[Maree et Maree (1980)]

表 1

Proto Philippine	Yami 語	Yami 語	Itbayat 語	Ivatan 語	Ivatan 語	Babuyan Claro 語	意味
	Imorod 方言	Iraralay 方言		Ivasay 方言	Isamorong 方言		
*Pr. Ph ānak	?ānak	?ānak	?ānak	?ānak	?ānak	?ānak	子
*Pr. Ph āsīn	?āsīu	?āsīn/ʃana	?āsīn	?āsīn	?āsīn	?āsīn	塩
*Pr. Ph bātu	vāto	vāto?	vāto	vāto?	vāto?	bāto?	石
*Pr. Ph dānum	rānom	rānom	rānom	dānom	rānom	rānom	水
*Pr. Ph [?]ūRat	?oyoyat/ kanokanot	kanokanot	?ōyat	?ōyat	?ōyat	?ōyat	血管
*Pr. Ph kūkuh	kōko?	kōko?	kōkoh	kōko?	kōko?	kōko?	風

表 2

Proto Philippine	Yami 語	Yami 語	Itbayat 語	Ivatan 語	Ivatan 語	Babuyan Claro 語	意味
	Imorod 方言	Iraralay 方言		Ivasay 方言	Isamorong 方言		
*Pr. Ph bī:laŋ	vīlaŋ	vīlaŋ	vīlaŋ	vīdaŋ	vīdaŋ	bīdaŋ	数える
*Pr. Ph bu:lan	vōʃan	vōʃan	vōhan	vōhan	vōhan	bohan	月
*Pr. Ph da:Raŋ	ʔāla?	ʔāla?	rāya	rāya?	rāya?	rāya?	血
*Pr. Ph ka:yuh	kāyo?	kāyo?	kāyoh	kāyo?	kāyo?	kāyo?	木
*Pr. Ph ŋi:pən	ŋōpən	ŋōpən	ŋīpən	ŋīpən	ŋīpən	ŋīpən	歯
*Pr. Ph da:lan	ʔāʔāʃan	ʔāʔāʃan	rārāxan	rārāhan	rārāhan	rārāhan	道
*Pr. Ph wa:say(鉄)	wāsay	wāsōy	wāsay	wāsay	wāsay	wāsay	斧

(B) フィリピン祖語のアクセントの反映

まず、第一に問題になるのがフィリピン祖語 (Proto-Philippines: Pr. Ph.) のアクセントの体系がバタニック諸語に引き継がれているかどうかということが問題になる。ここでは、Zorc (1978) によるフィリピン祖語における個々の単語のアクセントについて述べたリストをもとにしている。部分的には必ずしも承服しがたい所があるが、ほとんどが妥当なものであるので使用した。

(1) フィリピン祖語で “*Pr. Ph ~” の場合

上記の表 1 でフィリピン祖語の “短一長” のタイプ (*Pr. Ph ~) の単語はすべてバタニック諸語においては保存されている。

(2) フィリピン祖語 “*Pr. Ph --” の場合

一方, “長一長” のタイプ (*Pr. Ph --) ではどうかであろうか。

表 2 の結果より “長一長” の場合に後から二番目の音節 (Penultimate) の音節の長さが, バタニック諸語に入るとすべて短くなり “短一長” (~) という形に変化している。

(1) と (2) の結果によりフィリピン祖語における単語の分節的な音素はそのまま, または, ある規則的な変化をして保存されているのに対してアクセントはすべてひとつのタイプに統合されているのがわかり, バタニック諸語のすべての言語に関してフィリピン祖語 (Pr. Ph.) のアクセントの反映は何も無い。しかしながら, 上記の表で取り上げた言語は共時

的にはアクセントの体系を持つものもある。

(C) アクセント体系の有る言語と無い言語の違い

(A) で述べたように Ivatan 語, Babuyan 語にはアクセントの体系が有り, Itbayat 語と Yami 語の Iraralay 方言では確実にアクセント体系が存在しないし, また, Yami 語の Imorod 方言では不確定である。

そこで, 次にアクセント体系の存在する言語の対語 (minimal pair) を見てみる。

表 3

言 語 意 味	Ivatan		Babuyan Claro
	Ivasay	Isamorong	
目 生, 未熟	mata? ma?ta/ ma:ta?	mata? ma:ta?	mata? ma:ta?
人 海, 塩水	tao? ta:wo	tao? ta:wo	tao? ta:wo

そして, それぞれの単語のフィリピン祖語の形を見ると,

目: *Pr.Ph māta?

生, 未熟: *Pr.Ph ha: taq/ā:ta?16)

人: *Pr.Phta:[?]uh, 海, 塩水: 不明

次に, Ivatan 語 Isamorong 方言の対語 (minimal pair) の強弱 (stress), 高低 (pitch) そして, 長さ (Duration) をソナグラフによって示す17)(図 2~11)。

ところで, この対を示す単語を Itbayat 語について見てみると, 次のようになる。(表 4)

表 4 のように Isamorong 方言では長さとして表出している部分は Itbayat 語では“ha”という形になっていて, ある音節またはある音が脱落して長さに変化しているという予測がたつ。

そこで, 以下の節では Itbayat 語の /h/ に

表 4

	Itbayat	Ivatan (Isamorong)
目 生, 未熟	mata? mahata?	mata? ma:ta?/ma?ta
人 海, 海水	tao? tahaw	tao? ta:wo

ついて他の言語との関係を考えてみることにする。

(D) Itbayat 語 /h/ の Ivatan 語への反映

i) Itb. #hC₁……の場合

Itbayat 語における語頭の /h/ は, 一般的には, 語頭に /h/ を含む二重子音が無いので, #hv という形だけになる。

表 5

意 味	Itbayat	Isamorong
中	havak	?avak
低	haxbo	?ahbo
影になる	havog	?avog
年	hawan	?awan
ゆわえる	hovay	?ovay
脳みそ	hotak	?otak
喉咽を切る	hi?dgo	?i:dgo
参加させる	hitjay	?i:tjay

語頭の /h/ は Isamorong 方言では [?] になる。しかし, Isamorong 方言の語頭の [?] は弁別的ではない。

ii) Itb. ……v₁hv₂……の場合

a ① aha

Itbayat	Isamorong	意味
tahaw	ta:wo	海, 塩水
mahata	ma:ta/ma?ta	生, 未熟
nahaw	na:w (海草)	海の貝

16) この形であると Itbayat 語の mahata を導き出すことは出来ない。以後は, 一応, この形 (*Pr.Ph a:taq) をフィリピン祖語とは考えないで論をすすめて行く。

17) ソナグラフは, 東京外国語大学 AA 研の機械を使わせていただいた。

i) mata vs. ma:ta

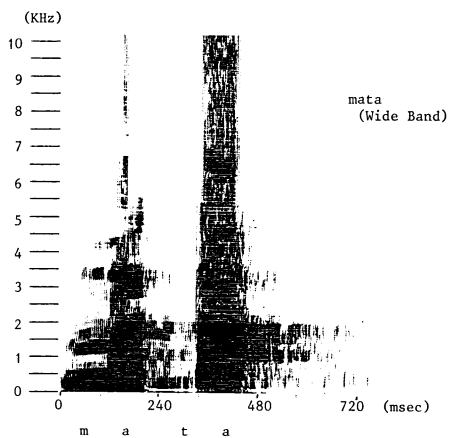


図 2

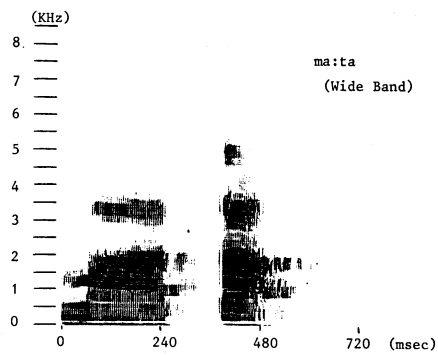


図 4

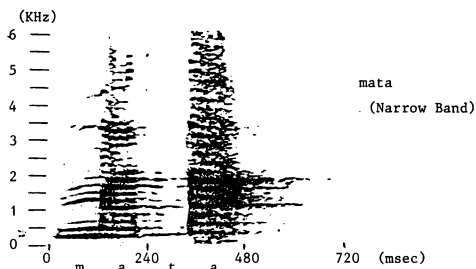


図 3

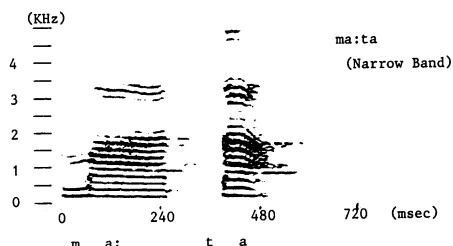


図 5

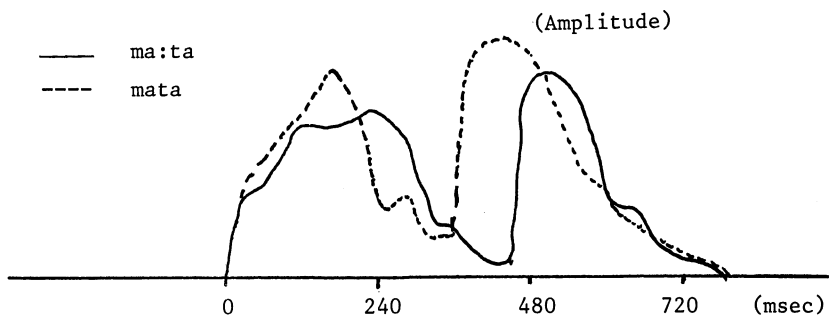


図 6

ii) tao vs. ta:wo

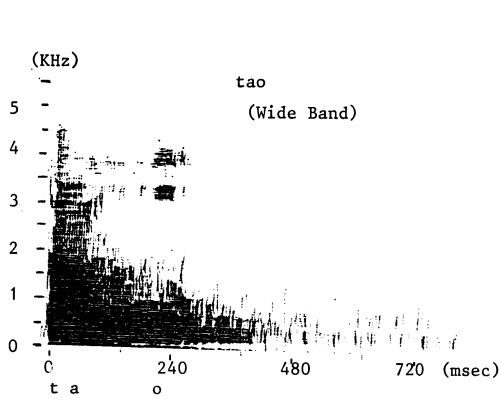


図 7

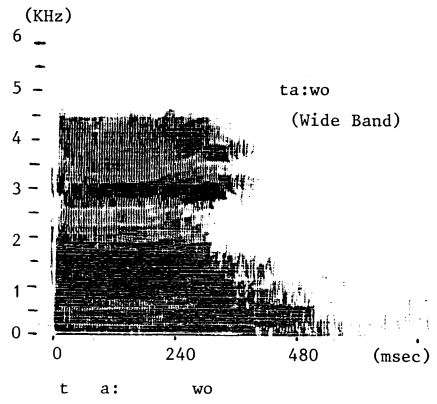


図 9

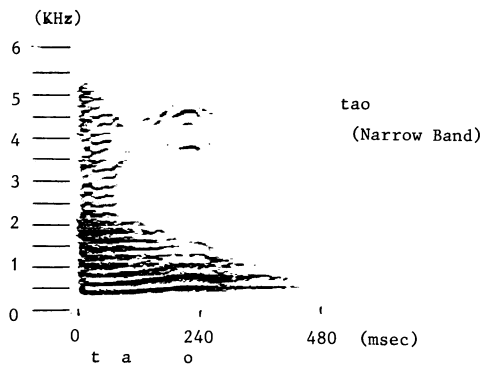


図 8

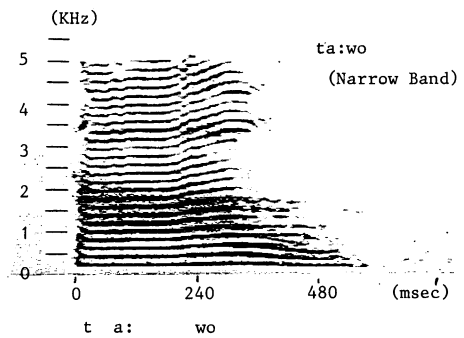


図 10

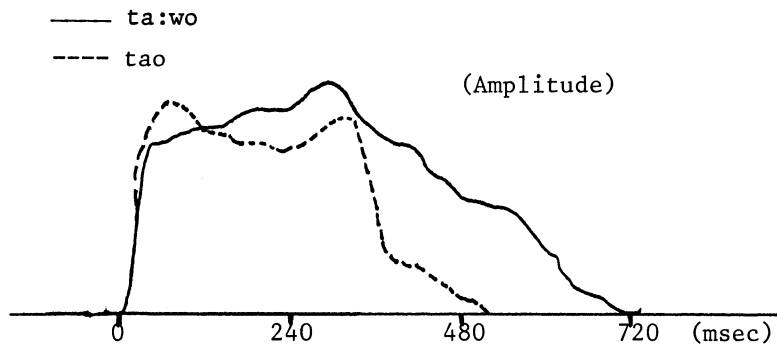


図 11

② ahi

Itbayat	Isamorong	意味
omrahi	omlayi	傷
karahid	kalayid	くまで
mahiñan	mayiñan	痛む

③ aho

Itbayat	Isamorong	意味
matoha	matowa	熟している
viyaho	viyawo	蘆
vahoyan	vawoyan	水を加える

④ ahə

Itbayat	Isamorong	意味
vahəy	vahəy	言う ¹⁸⁾

b ① iha

Itbayat	Isamorong	意味
vihay	viyay	生きている, 生(せい)
miharit	miyalit	同じ

② ihi

Itbayat	Isamorong	意味
irihid	idiyid(何も無い)	こすり落す

③ iho

Itbayat	Isamorong	意味
tfitjihod	tjotfod	スプーン (木製)

c ① oha

Itbayat	Isamorong	意味
doha	dowa	2(数)
toha	towa	熟している

② ohi

Itbayat	Isamorong	意味
mohiñan	mi:ñan	髭

③ oho

Itbayat	Isamorong	意味
tohor	to:ol	新芽
tohay	to:oy	つきさす
vohok	vo:ok	髪
xoho	ho:o	涙
tohod	to:od	膝

d ① əhə

Itbayat	Isamorong	意味
kəhət	tʃəkə:ət	小刀

以上が現在の手持ちの資料の中で見つけれられたもので, ihə, əha, əhi, əho は資料には無い。

iii) Itb #...v₁hc₁...

このタイプは, ahc₁, ihc₁, ohc₁, hc₁ の四種類が考えられる。

a #...ahc₁...

Itbayat	Isamorong	意味
mahkax	ma:kah/ma?kah	皮をむく
mahnənəŋ	ma:nənəŋ	確實
mahpaw	ma:paw/ ma?paw ¹⁹⁾	軽い

但し, c₁=x の場合には長くならない

Itbayat	Isamorong	意味
ahxo	aho	杵

b #...ihc₁...

Itbayat	Isamorong	意味
tjihmat	tjimat (ぼっぼっ)	思いつき
ihmway	imway	ふくらむ
ihwaŋ	iwaŋ	開ける

18) C₁C₂ という形では Itbayat 語とその他の言語・方言の間でおもしろいことがある。

Itbayat	Isamorong	Imorod	意味
mavaəŋ	mavahəŋ	mavaʔəŋ	黒
marəət	marahət	marəʔət	悪
hinaət	nahət	?	ねたみ

もし, Itbayat 語の v₁əə という形を考えて, それが Isamorong の v₁hə になるとすると vahəy はどうなるのだろうか。

19) インフォーマントによっては, ma?paw ‘軽い’ と ma:paw ‘淋しい’ を区別するが, すべての人が必ずしも区別するわけではない。ma?paw を ma:paw と発音する人もいる。

c	#...ohc ₁ ...		
	Itbayat	Isamorong	意味
	mohdan	momodan moʔdan(Ivasay)	鼻
	tomohdaw	tomowaw	現れる

第四番目の #...ohc₁... のタイプは資料には出て来ない。

以上のデータをまとめると次のようになる。

- 長音化する。
aha, ohi, oho,
ahc₁, hi, əhə,
(ihi), (iho)²⁰⁾
- 他の子音に変化する。
 - h → y
ahi, iha, (ihi)
 - h → w
aho, oha, iho
- 変化無し
ahə, (ihə)
- 消失または [ʔ]
ohc₁

上のまとめの結果をみると、v₁hv₂ の形が長音化する場合が多く、特に、v₁=v₂ が多いように思える。その事から、/h/ が脱落して母音が重なり結合したかのように思える。

しかし、vohok → vo:ok の形や v₁≠v₂, vhc₁, hi- については説明が不十分である。また一方、次のようなおもしろい例がある。

表6

意味	Itbayat	Isamorong
のどの渇き	mahwaw	ma:waw~maʔwaw
軽い	mahpaw	ma:paw~maʔpaw
寒さ, 冷さ	mahxən	maʔhən
生, 未熟	mahata	ma:ta, maʔta (Ivasay)
鼻	mohdan	momodan, moʔdan (Ivasay)
沈む	pahnəd	paʔnərən

表6の例は長音化するのが大部分であるが、

ある特定の単語に、または、Ivasay において“母音+ʔ”という形が残っていることを考えてみると、/h/ が消失して母音が融合したのではなく、/h/ がʔに変わり、その後母音が消失した。そして、その次の段階でʔが消失すると同時に前(後)の母音が長くなるという過程を考えた方が良いようである。そのようにすれば、/h/→/y/, /h/→/w/ と同じように /h/ の別の子音の変化として統一がとれるのである。

以上、まとめると

v₁hv₂ → v₁yv₂ (h → y タイプ)
(a-②, b-①, ②)

v₁hv₂ → v₁wv₂ (h → w タイプ)
(a-③, c-①)

v₁hv₂ → v₁hv₂ (h → h タイプ) (a-④)

となるし、それ以外は、

v₁hv₂ → v₁ʔv₂ → v₁ʔ → v₁: (h → /:/ タイプ)

また、v₁hc₁ は

v₁hc₁ → vʔc₁ → v:c₁ (h → /:/ タイプ)
(ただし、c₁≠w, m)

ただし c₁=w の時

vhc₁ → v₁ʔc₁ → vc₁ (iwanŋ) (h → ϕ タイプ)

そして、c₁=m の時

v₁hc₁ → v₁ʔc₁ → v₁c₁ (momodan)
(moʔdan) (h → ϕ タイプ)
(iii-b)

一方、hi の場合には

hi → ʔi → i: (i:ɔɔ) (h → /:/ タイプ)

となる。

この節の結果としては、Itbayat 語で /h/ であられるものが、ある環境で歴史的变化のために“ʔ”になり、それが消失したと同時にその代償作用として母音が長くなり対立を示すようになったと考えられる。すなわち、“ʔ”の消失によって Isamorong ではアクセント体系が発生したのである。

ところで、先の分析では、その比較の際に Itbayat 語を中心にして考えたが、ここで

20) ihi の形は iyi に、iho は iwo に変化したと考えられないこともないので、1と2に入れた。

Itbayat 語の /h/ がパタニック祖語で /h/ であったか、/?/ であったかという問題が出て来る。

大部分のフィリピン諸語を見ると Itbayat 語で /h/ に対応するものはすべて /h/ で出て来る。そして、ある単語は /h/ そのままで残っているの、Itbayat 語の /h/ の方がその他の“?”に比べて古いように思われる。

以上の結果を図示的にまとめると次のようになる。(ここでは [h → /:/ タイプ] に限定する。)

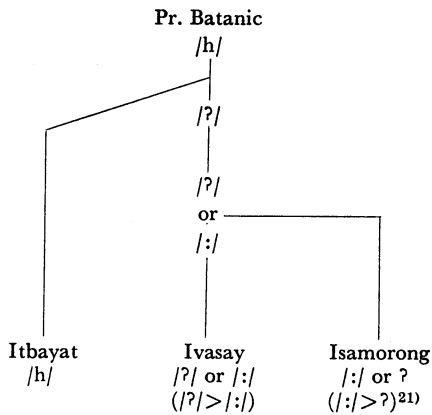


図12 [h → /:/ タイプ]

(E) Itbayat 語の /h/ の Babuyan 語への反映

(D) で Isamorong 方言と Ivasay 方言における Itbayat 語の /h/ の反映を見て来たわけであるが、Babuyan Claro 語の方はどうであろうか。

表7により Babuyan Claro 語でも [h → /:/ タイプ] は長音化しているので、全くタイプとしては Isamorong と同じである。ただし、“?”への変化は現在の調査の段階ではその残存物は残っていない。

(F) Itbayat 語の /h/ の Yami 語への反映

次に問題になって来るのが Yami 語である。

表7

意味	Itbayat	Isamorong	Babuyan
蘆	viyaho	viyawo	biyawo
同じ	miharit	miyalit	miyalit
動物	vinihay	viniyay	biniyay
熟している	matoha	matowa	matowa
言う	vahəy	vahəy	bahəy
杵	ahxo	aho	aho
遅い	mahaxay	ma:hay	ma:hay
軽い	mahpaw	ma:paw ~ma?paw	ma:paw
生, 未熟	mahata	ma:ta	ma:ta
海, 塩水	tahaw	ta:wo	ta:wo
涙	xoho	ho:o	hoho/ho:o/ho:
膝	tohod	to:od	to:od

Yami 語にはいくつかの方言があることがわかっており [Ferrel (1969)], 現在も方言調査が継続中である。ここに取り上げる資料は、およそその輪郭がつかめていて、資料の量が多い Iraralay 方言と Imorod 方言を取り扱うことにする。

Yami 語の方言中にはっきりとアクセントの体系があると言い切れる方言は無い。しかし、ある方言では絶対に対立を示さないが、別の方言では必ずしもアクセントによって区別していると断定は出来ないが、何かそのようなものがある方言がある。しかしながら、後者のような方言においても個人個人によってもその差が大きい。

Iraralay 方言においては、Isamorong 方言において対立を示す単語においても区別をせず、同音異義語として取り扱われている。

表8

意味	Itbayat	Isamorong	Iraralay
生, 未熟	mahata	ma:ta	mata
目	mata	mata	mata
海, 塩水	tahaw	ta:wo	tao
人	tao	tao	tao

21) Ivasay 方言では明らかに ? (声門閉鎖音) が弁別的であるが、Isamorong 方言ではっきりと ? が音素としてたてられるかどうか疑問なので // を付加しなかった。

一方、Imorod 方言では必ずしも上のような Isamorong 方言または Itbayat 語の対立が失われているわけでは無い。しかし、それはアクセントにより対立を示すと強く主張出来ない、かすかなものである。

Imorod 方言では次のような例がある。

表9

意 味	Itbayat	Isamorong	Imorod
生, 未熟 目	mahata mata	ma:ta mata	ma-ta/mata mata
海, 塩水 人	tahaw tao	ta:wo tao	ta-wo/tawo tao

特に後者の対語は明らかにこれらの二単語を区別しており、その違いは少し長目であるのと明確な円唇化があるかどうかである。すなわち、この二つの現象は前の音節から次の

音節へのわたりが長いということを示している。

そこで色々な単語について考えてみることにする。

表10の資料から、Yami 語において、特に Iraralay 方言では、Itbayat 語の /h/ は /y/, /w/ になる以外はすべて消失している。また、Imorod 方言ではその痕跡をかすかに残していることがわかる。

ところで、Itbayat 語の /h/ は Isamorong 方言の /ʔ/, /:/ に変化している一方、Yami 語では消失しかかっているという事実がある。そうすると、この消失の仕方がどうなっているかということが問題になる。すなわち、

- i) /h/ → ϕ
- ii) /h/ → ? → ϕ
- iii) /h/ → ? → /:/ → ϕ

という流れが理論的に考えられる。当然の事

表10

意 味	Itbayat 方言	Ivatan 語	Yami 語	
		Isamorong 方言	Imorod 方言	Iraralay 方言
脳 引 (ひもを) とく 中 (食物が) 未 熟	hotək horotən hovayən havamaw mahata	ʔotək ʔolotən ʔovayən ʔavak mava:wo maʔta/ma:ta	ʔətək ʔorotən ʔovayən ʔavak mavaw mata/ma:ta	wotək ʔorotən ʔovayən ʔavak yamavvow mata
海 涙 髪 膝	tahaw xoho vohok tohod	ta:wo ho:o vo:ok to:od	tawo/ta:wo kaoʔo ʔovok ʔotod	tao kawowo ʔavok ʔattod
遅 寒 軽	mahaxay mahxən mahpaw	ma:hay maʔhən ma:paw	maʔay maʔən mapaw	maʔəy maʔən mapowo
鼻 髭	mohdan mohiñən	moʔdan (Ivasay) momodan mi:ñən	momodan ʔamiyŋ	momodan ʔamiyŋ
動 物 生	vinihay vihay	viniyay viyay	vinay viyay	vinəy viyəy
2 (数)	doha	dowa	dowa	dowa
痛 言	mahiñən vahəy	mayiñən vahəy	məyŋən ʔ	mi:ŋən vaʔəy

表11

意味	Itbayat	Ivatan	Yami	
		Isamorong	Imorod	Iraralay
膝	tohod	to:od	oto-d	attod
髪	vohok	vo:ok	ovo-k	avo-k
涙	xoho	ho:o	kaofo	kawowo

ながら $\phi \rightarrow /h/$ という形はフィリピンの諸語を見てみると考えられない。

ところで、前に示したが次のようなおもしろい例がある。

上の表11の例は明らかに音位転換 (metathesis) がおこっている。この事実と i)–iii) の変化を考えると

- i') tohod $\begin{cases} \rightarrow \text{tood} \rightarrow \text{otod} \\ \rightarrow \text{hotod} \rightarrow \text{otod} \end{cases}$
 - ii') tohod $\rightarrow \text{to?od} \rightarrow \text{?otod}$
 - iii') tohod $\rightarrow \text{to?od} \rightarrow \text{to:od} \rightarrow \text{oto-d}$
- という変化が考えられる。

i) のタイプの変化が起こらないと言い切ることは出来ない。確かに可能性はあるが、音位転換の場合には何らかの引き金があるはずである。たとえば、日本語の atarasii (新しい) は aratasi であり、“t” と “r” との音位が転換した例であるし、karada (体) を kadara という方言もある。また、古代英語の brid (鳥) や bridda (三番目) は現代英語では bird や third になり、その場合にも “r” ~ “d” の同じ調音点であるということが引き金になっている。ところで、このヤミ語の例の場合には、t, b(v), x(ɸ) という音声的に h と共通項を持たない。それゆえ、i) の可能性は非常に低いように思われる。

ii) と iii) の場合には、その違いとしても?の消失だけで終るか、または、その消失による代償作用が起り、その代償作用の結果が消失するということである。

iii) の変化を強く指示する証拠は無い。ヤ

ミ語の Imorod 方言においてはアクセントの体系が全く無いと言って良いほどの痕跡しか残っていない。しかし、そうとは言ってもフィリピン諸語では単にある母音または子音が消失するだけでは無く、音節一定性 (Syllable Timed) 言語として何らかの代償作用が起こるはずである。

また、ii) の変化では音位転換の引き金になる可能性は充分に有る。すなわち、t, b(v), とは? は stop という点で、h とは glottal という点で共通の要素を持ちうる。ただ、Imorod 方言のような資料が有るという事を考慮に入れると ii) と iii) を折衷した形で考えざるをえない。

一方、Itbayat 語の x の他の言語への反映を考えてみよう。

表12

*Pr. Ph ²²⁾	Itbayat	Ivatan	Yami
*l	x(ɸ)	h	ɸ
bu:lan	boxan	bohan	boɸan
walo	waxo	waho	waɸo
qu:lo	oxo	oho	oɸo

表12のようにフィリピン祖語の *l は、Itbayat 語では x(ɸ)、Ivatan 語では h、そして、Yami 語では ɸ に変化している。

It. Iv. Yami

*Pr.Ph l \rightarrow x \rightarrow h \rightarrow ɸ ($\rightarrow \phi$)²³⁾
w

22) *Pr. Ph は Zorc (1978) よりとった。

23) ɸ (咽頭摩擦音) という音は Yami 語のどの方言にも残っているが、非常に聞きとりやすく、インフォームントによっては何も無いとしている人もいて、確実に消失しかかっている。

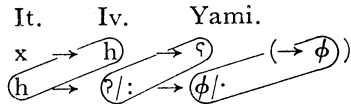
この変化に先の h の変化を加えて考えると

Itbayat Ivatan Yami

*Pr.Ph l → x → h → ʔ

*Pr.Ph h → h → ʔ/: → ϕ/

となる。ここで h の部分から変化を見てみると



というきれいな移行のパターンを示す。

以上の事により、h → ʔ の形、すなわち、ii) または iii) 変化の方が妥当性が高い。

ii) と iii) の折衷形を考えると、ʔ の消失と同時に少しだけ母音が長くなったが、それを保持する力がなかったということである。

iv) h → ʔ → ·(ʔ) → ϕ → ϕ

という形を tohod にあてはめると

v) tohod → toʔod → to·(ʔ)od
→ (ʔ)oto·d → (otod)

という変化が考えられる。

v) に対する説明としては、h から ʔ に変化し、その後、声門閉鎖音が消失しかかっている時に母音が少し長くなり、o·o という特別な母音の連続の為に母音が前に出て音位転換が行われたのである²⁴⁾。

V. 結論

非常に狭い地域でいくつかの言語と方言に分かれているバタニック諸語において、もとのフィリピン祖語 (Proto-Philippine) のアクセントの体系を失い、その後ある環境にある子音 -h- の音韻変化により超分節音素的な形が発生し、それが弁別的になったのである。しかし、このアクセントもすべての言語に起ったわけでもなく、完全に発生したグループ、発生しなかったけれどもそれも消失してしまっただけのグループもあった。また、多分、この変化が歴史的にはそれほど古い現象ではないようで、そのことは現地調査での結果をみてもすぐ理解出来る。

Itbayat 語では子音をそのまま残して現在にいたり、Ivasay と Isamorong の両方言は子音から変化した長さアクセントを保持しようとしているが、未だに古い形 /ʔ/ も残している。一方、Yami 語においてはその傾向を保持しようとする方向にはなく、消失する傾向にあり、Iraralay 方言では完全に消失してしまっていて Imorod 方言ではほんのかすかにその痕跡が残っているだけである。

また、このアクセントの発生に声門閉鎖音 (ʔ) が関与しているということはまことに興味深いことである。

以上の結果から Proto Batanic (バタニック祖語) からの /h/ に関する変化は、次のようになる。([h → :] タイプのみ)

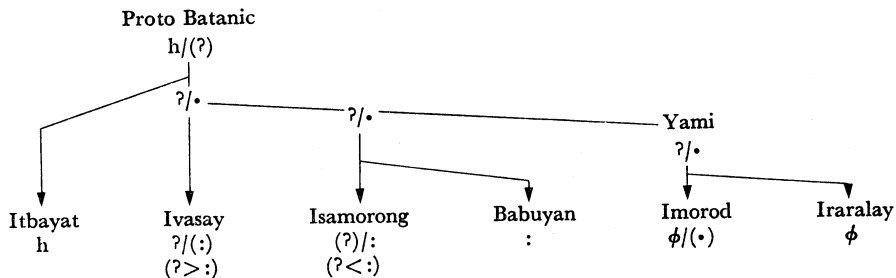


図13 [h → : タイプ]

24) もし長さを考えに入れなければ、oho '頭' が hoo に、そして、hoo '涙' が oho になっても良いはずであるが、oho の方は変化しなかったということは、ho·(ʔ)o という o·(ʔ)o という連続に何か原因があったように思われる。

参 考 文 献

- Asai, E. 1936. *A Study of the Yami Language: An Indonesian Language Spoken on Botel Tobago Island*. Leiden, Universiteits boekhandel en Antiquariaat J. Ginsberg.
- Blake, F. 1925. *A Grammar of the Tagalog Language* (American Oriental Series Vol. 1.). New Haven, American Oriental Society.
- Bloomfield, L. 1917. *Tagalog Texts with Grammatical Analysis*. Urbana, University of Illinois.
- Blust, R. A. 1976. "Review of O. C. Dahl (1976) *Proto-Austronesian*." *Language*, No. 52, pp. 221-237.
- Bowen, D. 1969. *Beginning Tagalog*. L.A. Univ. of Calif. Press.
- Brandstetter, R. 1910. *Wurzel und Wort in den indonesischen Sprachen* (Monographien zur indonesischen Sprachforschung VI.). Luzern, Buchhandlung Haag.
- 1911. *Sprachvergleichendes Charakterbild eines Indonesischen Idiomes* (Monographien zur indonesischen Sprachforschung VII.). Luzern, Buchhandlung Haag.
- 1915. *Die Lauterscheinungen* (Monographien zur Indonesischen Sprachforschung XII.). Luzern.
- Charles, M. 1974. "Problems in the Reconstruction of Proto-Philippine Phonology and the Subgrouping of the Philippine Languages." *Oceanic Linguistics*, Vol. 13-2, pp. 457-509.
- Cottle, M. & S. Cottle. 1958. "The Significant Sounds of Ivatan." *Studies in Philippine Linguistics*, Vol. 3, pp. 24-33.
- Dahl, O. 1976. *Proto-Austronesian* (Scandinavian Institute of Asian Studies Monograph Series 15.). Lund and London, Curzon Press. (2nd Edition)
- 1981. *Early Phonetic and Phonemic Changes in Austronesian* (Institutet for sammenlignende kulturforskning. Series B. LXIII.). Oslo, Universitetsforlaget.
- Dampier, W. 1697. *A New Voyage round the World*. London, Argonaut Press.
- Dempwolff, O. 1925/26a. "Die L-, R- und D-Laut in austronesischen Sprachen." *Zeitschrift für Eingeborenen Sprachen*, Vol. XV, pp. 173-320.
- 1926b. "Ivatan als Test-sprachen für uraustronesisches I." *Zeitschrift für Eingeborenen Sprachen*, Vol. XVI, pp. 298-302.
- 1934/37/38. *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes*, 3 vols. (Beiheft zur Zeitschrift für Eingeborenen-Sprachen 15, 17, 19.) (Reprinted in 1969)
- Dyen, I. 1953. *The Proto-Malayo-Polynesian Laryngeals*. Baltimore, Linguistic Society of America.
- 1971. "The Austronesian Languages and Proto-Austronesian." *Current Trends in Linguistics* (Sebeok, T. ed.), Vol. 8, pp. 5-54. The Hague, Mouton.
- 1985. *Linguistic Subgrouping and Lexicostatistics* (Janua Linguarum No. 175.). The Hague, Mouton.
- et C. D. McFarland. 1970. *Proto-Austronesian Etyma Constituting an Austronesian Cognate Finder List*. Yale, Mimeographed.
- Ferrel, R. 1969. *Taiwan Aboriginal Groups: Problems in Cultural and Linguistic Classification* (Institute of Ethnology, Academia Sinica Monograph 17.). Taipei.
- Gonzalez, A. 1970. "Acoustic Correlates of Accent, Rhythm and Intonation in Tagalog." *Phonetica*, Vol. 22, pp. 11-44.
- Haudricourt, A-G. 1961. "Bipartition et tripartition des systems de tons dans quelque langues d'Extreme-Orient," *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*, Vol. 56, pp. 163-180.
- Heye, J. & C. A. Hidalgo. 1970. "An Outline of Southern Ivatan Morphology." *General Linguistics*, Vol. 1. No. 2, pp. 9-51.
- Hidalgo, C. A. & A. C. Hidalgo. 1967. "Ivatan Morphology: The Predicatives." *Philippine Journal of Linguistics*, Vol. 1. No. 2, pp. 9-51.
- 1971. *A Tagmemic Grammar of Ivatan* (Philippine Journal of Linguistics Special Monograph. No. 2.). Manila.
- Jeng, Heng-hsiung. 1981. "Yami Verbal Classification and the Cooccurrence of Cases." *Philippine Journal of Linguistics*, Vol. 12. No. 1, pp. 29-56.
- Ladefoged, P. 1975. *A Course in Phonetics*. New York, Harcourt Brace Javanovich Inc.

- Leben, W. 1980. "A Metrical Analysis of Length." *Linguistic Inquiry*, Vol. 11, pp. 497-509.
- Lehiste, I. 1985. "An Estonian Word Game and the Phonematic Status of Long Vowels." *Linguistic Inquiry*, Vol. 16, pp. 490-492.
- Liu, Pin-hsiung 1981. "Yami Text: Tarak Myth." *Bulletin of the Institute of Ethnology* (Academia Sinica. Vol. 50.). pp. 111-169.
- Maree, R. & J. Maree. 1980. *San Markos*. Manila, New York International Bible Society.
- Matisoff, J. A. 1973. "Tonogenesis in Southeast Asia." L. M. Hyman (ed.), *Consonant Types and Tone* (Southern California Occasional Papers in Linguistics. Vol. 1). pp. 71-95.
- McCarthy, J. 1981. "A Prosodic Theory of Non-concatenative Morphology." *Linguistic Inquiry*, Vol. 12, pp. 373-418.
- McFarland, C. D. 1977. *Northern Philippine Linguistic Geography*. Tokyo, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Melville, H. 1851. *Moby-Dick: or the Whale* (Reprinted in The Library of America.)
- 森口恒一 1977. 「タガログ語のアクセントに関する覚え書き」『東南アジア研究』Vol. 15. No. 1 pp. 79-94.
- 1980. "The Yami Language."『黒潮の民族・文化・言語』黒潮文化の会編 東京 角川出版. pp. 308-386.
- Moriguchi, T. 1982. "Some Notes on Accent in Kbalan: A Minority Aboriginal Language in Formosa." *Journal of Asian and African Studies*, No. 24, pp. 120-132.
- 1983a. "An Inquiry into Kbalan Phonology." *Journal of Asian and African Studies*, No. 26, pp. 202-219.
- 1983b. "A Preliminary Report on Ivatan Dialects." *Batan Island and Northern Luzon*. Kumamoto, University of Kumamoto. pp. 205-253.
- 森口恒一 1985. 『ピリピノ語(タガログ語)文法』東京 大学書林.
- 小川直義・浅井恵林 1935. 『原語による台湾・高砂族伝説集』東京 刀江書院.
- Reid, L. A. 1966. *An Ivatan Syntax* (Oceanic Linguistics Special Publication, No. 2.) Honolulu.
- Reid, L. A. 1971. *Philippine Minor Language: Word Lists and Phonology* (Oceanic Linguistics. Special Publication, No. 8.). Honolulu.
- Retana, W. E. 1834. *Archivo del Bibliófilo Filipino*, Vol. I-V. Madrid.
- Schachter, P. & F. Otanes 1972. *A Reference Grammar of Tagalog*. L.A. Univ. of Calif. Press.
- Scheerer, O. 1908. "The Batan Dialect as a Member of Philippine Group of Languages." *Division of Ethnology Publication*, Vol. V. part 1, Manila.
- 1925. "Batan Texts with Notes." *Philippine Journal of Science*, Vol. 3. No. 3, pp. 301-341.
- Stemberger, J. P. 1984. "Length as a Suprasegmental: Evidence from Speech Errors." *Language*, Vol. 60. No. 4, pp. 895-913.
- 鳥居龍蔵 1902. 「紅頭嶼土俗調査報告」『東京帝国大学人類学科年報』pp. 115-.
- Trubetzkoy, N. S. 1939. *Grundzüge der Phonologie* (Travaux du cercle Linguistique de Prague 7.). Prague.
- Tsuchida, S. 1976. *Reconstruction of Proto-Tsuoic Phonology* (Study of Languages & Cultures of Asia and Africa. Monograph No. 5.). Tokyo.
- 土田 滋 1977. 「バシイック諸語の文化圏」『日本民族と黒潮文化』黒潮文化の会編 pp. 296-317. 東京 角川出版.
- Tsuchida, S. 1981. "Fish Names in Yami (Imorod Dialect)." *Working Papers in Linguistics*. '81. pp. 7-25. Tokyo. Univ. of Tokyo.
- 土田 滋 1984. 「[人と学問]浅井恵倫」『社会人類学年報』東京 弘文堂. pp. 1-28.
- Vocabulario Español-Ibatán*. 1914. Manila, Univ. of Santo Tomas.
- Vocabulario Ibatán-Español*. 1933. Manila, Univ. of Santo Tomas.
- Yamada, Y. 1967. "Fishing Economy of the Itbayat, Batanes., with Special Reference to its Vocabulary." *Asian Studies*, Vol. V. No. 1, pp. 137-219.
- 1972a. "Consonantism in Itbayaten." *Gengo Kenkyuu*, Vol. 61, pp. 57-82.
- 1972b. "Speech Disguise in Itbayaten Numerals." *Asian Studies*, Vol. X, pp. 44-49.
- 山田幸宏 1974. 「バシイック諸語」『季刊・どるめん』Vol. 4. pp. 66-88.
- Yamada, Y. 1976. *A Preliminary Dictionary of Itbayaten*. Manuscript.
- 1981. *An English-Itbayaten Dictionary*. Manuscript.

- Zorc, D. 1972. "Current and Proto Tagalic Stress." *Philippine Journal of Linguistics*, Vol. 3. No. 1, pp. 43-57.
- 1978. "Proto-Philippine Word Accent: Innovation or Proto-Hesperonesian Retention?" *SICAL paper*. (Pacific Linguistics C. 61) pp. 67-119.
- 1979. "On the Development of Contrastive Word Accent: Pangasinan, A Case in Point." *South-East Asian Linguistics*, Vol. 3. (Nguyen Dang Liem, ed.). (Pacific Linguistics C. 45:) pp. 241-258.
- 1983. "Proto Austronesian Accent Revisited." *Philippine Journal of Linguistics*, Vol. 14. No. 1, pp. 1-24.